【主題】誰もが行きたくなる魅力ある桃生中学校を目指して

【副題】地域と共に歩み、生徒の自己有用感を高める教育実践を通して

【学校・団体名】宮城県石巻市立桃生中学校
【役職名・氏名】校長・和泉　千佳子

１　はじめに

近年、日本全国の学校現場において大きな課題となっているのが、不登校生徒の増加である。本校でも、追跡できる記録にあるだけで、平成３０年、令和２年、令和３年、令和４年と、不登校生徒の出現率は７％を上回っており、特に令和４年の不登校生徒の出現率は１２％を記録している。原因は、生徒同士の人間関係によるトラブル、部活動での悩み、家庭環境や生活習慣の乱れや漠然とした不安など多岐にわたっているが、中でも学習面での不適応は大きな課題にもなっていた。

各種学力調査でも、正答率は全国平均を大きく下回る結果となっており、学校独自の生活アンケートや、生徒の生活適応感を測るASSESSなどでも、登校に不安を抱える生徒の多くは学習に対して不適応感を感じると回答する傾向が強かった。

これまで、本校では生徒の人間関係形成や健全な情緒的成長を促しながら、生徒の自助・共助力を発揮し、学力向上を目指すマルチ・レベル・アプローチ（MLA）に全校で取り組んできた。結果、生徒間の協働的な雰囲気の高まりを見取ることができていた。この取組に加え、昨年度より「誰もが行きたくなる魅力ある桃生中学校」をスローガンとした実践を開始した。

２　取組の概要

（１）生徒の実態を基幹とした授業の展開

本校の生徒は、素直で、何事にも一生懸命に取り組み、３年間の学校生活を通して、大きく成長している生徒が多い。授業にも意欲的に取り組んでいる場面が多く見られ、昨年度末の学校評価アンケートにおける生徒の回答では、「授業が分かる」と感じている生徒は９２％、「生徒一人一人の実態に応じた授業が行われている」と感じている生徒は９４％、「授業のねらいが分かり、学習内容の７割以上を理解することができた」と感じている生徒は９２％、「授業で『自ら学び深く考えること』ができた」と感じている生徒が９８％という結果となっており、意欲的な態度で授業に臨む生徒の様子をうかがうことができる。また、別の意識調査でも同様の結果が得られており、生徒の授業に向ける前向きな姿勢には疑いがない。年２回実施しているASSESSの結果も、概ね高い適応感を示している。特に、教師サポートに対する適応度は、全学級６０％を大きく超えており、生徒から教師への高い信頼を示していると言える。生徒と教師との良好な関係も、授業に対する意欲の高さに繋がっていると考えられる。しかし、逆に捉えると、それぞれの質問項目に対して否定的な回答をしている生徒が一定数いることがわかる。本校ではこの一定数の否定的な回答をしている生徒に焦点を当てた。生徒が自ら見通しを立てて学び、学習内容の定着を図る指導の在り方を充実させ、怠学や学業の不振を理由にする新規不登校の未然防止に努めることは、誰もが行きたくなる魅力ある桃生中学校の実現につながるものと考え、数学・英語については全クラスの授業に専門教科の教員２名ずつを配置した。また、全教科、全教員で以下のような手立てを実践した。

まず、生徒の興味・関心を喚起する授業の導入や、学習活動の工夫を、校内研究の視点にもあげ、具体的な手立てを検証した。「ゲーム形式の学習活動」や「先生を登場人物にした学習課題の提示」など、様々な工夫を各授業者で推進したが、中でも効果的と感じたのが「生徒にとって実生活に直結した事象を題材にした学習課題の設定」「生徒に必要感を感じさせる学習活動の設定」「教科を横断した学習」の３点であった。以下に、具体的な手立ての例を提示する。

①実生活に直結した事象を題材にした学習課題の設定

ア　「生徒の校則改定についての自分の意見」を題材にした意見文（国語）

イ　「修学旅行のルールについての学級の意見」を題材にした話合い活動（国語）

ウ　石巻市や宮城県で実際に運用されているエネルギー資源について紹介、現代の日本に適したエネルギー資源についての話合い活動（社会）

エ　「校外学習で学んできたこと」を題材にしたスピーチの課題（英語）

②生徒に必要感を感じさせる学習活動の設定

ア　文法に関する問題作成と下級生への出題（国語）

イ　卒業前、「充実した中学校生活を過ごすために」をテーマとしたスピーチを下級生へ発表（英語）

ウ　震災遺構への訪問学習で見学してきた内容について地域の防災訓練で地域住民に発表（総合）

エ　震災を風化させないための兵庫県竜山中学校との震災に関する交流授業（道徳）

オ　職場体験での学びスピーチ（総合）

写真　授業の様子　左：国語　右：英語

③教科を横断した学習

ア　東日本大震災を扱う題材のまとめに、防災学習の振り返りを設定（国語・総合）

イ　作成した意見文を基にした英語でのスピーチの原稿作成（国語・英語）

ウ　授業で学習した国際理解教材を基にした社会の授業でのレポートの作成（英語・社会）

まず、「生徒にとって身近な事柄を題材にした学習課題の設定」は、生徒にとって身近な話題であるがゆえに、具体的なイメージが湧きやすく、話合いや練り合いなどを要する学習で、多面的で具体的な意見が生徒からも出やすい。特に、英語科で取り組んだスピーチについて、特別活動や総合的な学習の時間、他教科での学びを基に行った際は、英語に対して苦手意識を持つ生徒も積極的に取り組む様子が見られた。

次に、「生徒に必要感を感じさせる学習活動の設定」では、発表や発信する相手が明確に存在し、自身の学習成果をまとめることで、使命感を持ち学習のモチベーションを挙げることができる。また、自分の学習の成果が、他者の学びを助けるという実感も得やすく、生徒の自己有用感の向上にも寄与すると考えられる。

これらの工夫を十分に設けた学習活動を推進することで、各教科の既習事項を総合的に関連させ、学びを深める視点が生徒に育っていた。このことが、生徒の自己有用感や自己肯定感を高め、その土台となる民主的で共感的な学年・学級の雰囲気作りに影響を与えていると考えられる。

（２）ＮＩＥ教育を活用した交流活動

①新聞を活用した「桃生タイム」の実践

本校では、月曜日から金曜日までの朝の１０分間の帯活動として、新聞記事を読み、その内容について自分の考えを書く活動、そして他者の考えを聞き、自分の考えを深める活動を行う「桃生タイム」を毎週実施している。また、発展的な活動として、帰りの会で関心を抱いた記事を要約して意見を述べる新聞スピーチや、国際理解の一環で SDGｓに関する英字新聞を作成するなど、道徳や社会科と関連して教科横断的な取組も行っている。

桃生中の「新聞タイム」定着
記事読み ノートで意見交換
深まる理解 広がる視野

写真　桃生タイムの新聞記事

このNIE活動（桃生タイム）を通して、他者の学びを尊重することや、互いに安心・安全を感じながら、考えや思いを深めることができ、生徒からは「文章を書くのに抵抗感がなくなった」や「友達の意見が参考になる」など、自分の思いを表現する力が身に付いたという反応があがっている。学校評価アンケートにおいても「自分の意見を自信を持って伝えることができる」と答えた生徒の割合が非常に高くなっていたことから、この活動を通して自己効力感の向上が見られることがわかった。

②新聞づくりで育む“伝える力”

本校の生徒は、防災・減災教育として震災遺構を見学する。見学の最後に語り部の方が必ずこの言葉を生徒に残す。「大切な人の命を守るために友達、家族、地域の人に伝えてほしい」。体験ありきの学習ではなく、生徒が防災・減災を自分事として考え、学びを深める方法はないだろうか。たどり着いたのが「防災・減災新聞」の制作である。

写真　震災遺構見学の様子

２・３年生の生徒全員が記事を１人１本ずつ執筆し、完成した新聞を石巻市の総合防災訓練で地域の方々へ配布した。さらに、生徒は制作した新聞を基に災害の恐ろしさや教訓を伝える語り部活動も行った。書いてまとめるだけではなく、人前で発表することで、今までの学びがより深まると考えたからである。また、震災遺構見学の前に河北新報社の出前授業を受け、見出しの付け方やわかりやすい文章の書き方を学んだ。見

学後は、生徒たちが書いた記事のどれをトップ記事にするのか、皆で話し合った。

昨年度は、小学生にも新聞を配布することを踏まえ、３年生が「防災・減災こども新聞」を制作した。小学生が読んでも理解しやすいように易しい言葉を選び、写真やイラストを多くした。地域の方は、生徒が作成した新聞を熱心に読み、「災害のことを考えるきっかけとなった」「中学生とつながる機会ができてうれしい」と話していた。小学生がじっと新聞を読んでいる姿も見られ、地域全体で防災・減災について考える機会を持てたと感じる。後日、１年生は先輩の活動を手本とし、同じく震災を経験した兵庫県竜山中学校の生徒に向けて、「防災・減災新聞」を制作し、道徳の授業で交流活動を行った。

写真　３年生が作成した防災・減災子ども新聞

この活動を通して、多くの生徒が「震災を詳しく知ることができたと同時に、わかりやすく伝えるためにどうすればよいかを考えるようになった」と話していた。相手意識を持ちながら自分の言葉で伝える力は、着々と伸びている。また、地域の防災・減災意識を高めるために自分の思いを真剣に伝える生徒の姿から、強い使命を感じると共に、「他人に自分の思いを伝えたい」「他人の役に立ちたい」という自己有用感や自己効力感を得ることができていると感じた。生徒の力で地域を支え、変えていく活動を今後も継続していきたい。

写真　市総合防災訓練における避難所での語り部活動の様子

（３）総合的な学習の時間等での地域との連携

本校では、総合的な学習の時間の学習で、地域の人口減少問題をきっかけにふるさとについて学ぶ学習をスタートするという工夫を設けた。自分の生まれ故郷の存続のために、より積極的な姿勢で学習に臨む様子が見られた。また、地域を知る活動の中で、桃生町の地形や風土についての理解を深め、それらを防災学習に繋げていった。それらの教育活動を展開するに当たり、以下のような具体的な手立てを講じた。

①総合的な学習の時間における地域資源の積極的な活用

１年生での職場訪問や職業講話、２年生での職場体験学習、そして３年生での地元特産品販売において、地元の企業や飲食店、JA や桃生総合支所等を積極的に活用し、地域の事業所等について学びを深めることで、地域のよさについて理解を深めた。また、生徒が考えた桃生町の地域特産品を、修学旅行で販売することにも各事業所から快くご協力をいただき、東京のキラキラ商店街では大盛況で完売することができた。これには生徒たちも大きな達成感や成就感を感じていたようである。

写真　修学旅行での特産品販売の様子

さらに、修学旅行での特産品販売の経験や反省を踏まえ、地域のお祭り（ものうふれあい祭）で地元の企業や飲食店とコラボしたオリジナル商品の販売やクイズ等、桃生を PR する活動でも地域の方や観光で来られた方に大好評で、生徒たちは自分たちで考案した企画の成功に大満足だった。

自分の住む地域のことを具体的に考える課題設定によって、生徒は真剣に学習活動に取り組んだ。また、学

写真　ふれあい祭での出店の様子と生徒作成の宣伝ポスター

校ではない場での発信を学習の目標と設定していたことも、生徒が緊張感をもって学びに向かうきっかけとなった。

②地域に貢献する活動

桃生地区の社会福祉協議会との連携で、地域の高齢者が多く参加するサロン活動に本校の生徒も一緒に参加し、地域の方と交流を深める活動を昨年度から行っている。また、今年度は新たに移動型児童館にもボランティアとして参加し、地域の小さい子どもや小学生と一緒に段ボールを使ったものづくりやカードゲーム、外でのボール遊びを行った。参加した子どもの保護者からは、「中学生がこういった活動をすることは本当にうれしいし、小さな子たちもお兄さんお姉さんと遊んでもらえて楽しいと思う。」といったご意見をいただいた。また、参加した生徒たちも、自分が楽しめたことはもちろんだが、「自分が必要とされたこと」や「地域の方々に小さな子への接し方が上手だとほめられたこと」などを振り返りにあげており、自己有用感や効力感を得ていたようである。

写真　地域のサロンや移動型児童館への参加の様子

③地域や小学校との連携

本校では、新規不登校未然防止の観点から、小学校とも連携し、学期ごとの取組の成果と課題や意識調査の結果について定期的に情報交換を行っている。また、小学校と中学校が共通のルールで家庭生活や学校生活を送ることができるよう、桃生地区の地域ぐるみ子ども健全育成会の協力をいただき、「桃生っ子７か条」を学校だけでなく桃生町に全戸配布し、地域を挙げて子どもの健全な育成のためにお力添えをいただいている。この他にも、今年度は中学校の運動会に小学生を招待し、「はねこ踊り」を一緒に踊る企画や、合唱コンクール・文化祭に小学生を招待するなど、中学校の魅力や楽しさを小学生に味わってもらう企画をたて、小中ギャップの抑制に努めている。将来の小中一貫校導入に向けてもこの取組を継続していきたい。

３　むすびに

本校では、「誰もが行きたくなる魅力ある桃生中学校」をスローガンとして、「活用する力を身に付ける授業づくりの工夫」と「生徒の自己効力感や学習の成果が感じられる指導の工夫」の２つの観点から実践を行ってきた。日々の授業はもちろんだが、総合的な学習の時間の取組や、ＮＩＥ教育の実践を通して、自己効力感や自己有用感を高め、学習への理解や関心の質を深めてきた。また、全ての活動において「人に伝える（表現する）」ことを念頭に置いたことにより、生徒たちはどうすれば自分たちの考えや伝えたいことがうまく表現できるかを常に意識するようになった。上手に伝えるために、様々な方法にチャレンジしたり、仲間同士で話し合ったりする機会を多く設けたことも、生徒自身の達成感やさらなる意欲の向上につながったように思える。さらに、これらの取組を通して、生徒の居場所づくりや、地域の一員としての自覚の醸成にもつながったと考える。

こうした実践の積み重ねにより、令和４年度からの不登校生徒数の劇的な減少はもちろんだが、昨年度、新規不登校生徒が１人、全体の不登校出現率を４％に抑えることができたことは大きな成果であるといえる（表）。また、これまで職員が個々に行ってきた取組に留まっていた実践が、より生徒のために還元できる、学校としての取組に認識を改めていくことで、職員が同じ目標に向かって一丸となることができた。

【表　不登校発生数】

	令和４年度	令和５年度	令和６年度
生徒数	１７８	１５６	１５０
不登校	２１	９	４
新規不登校	２	１	１
９０日越え	８	３	１

今後の課題としては、数年かけて精選してきたこれらの取組を継続し、生徒の意見等も反映させながらさらに進化させていくことである。また、教科横断的な取組にしていき、より一層学力の向上にもつなげていきたいと考えている。今後も、これらの課題に学校一丸となって取り組み、生徒・教師・保護者・地域と一体となって、課題の解決と本校の更なる発展に努めていきたい。